

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 川口 裕司 印

学位申請者 匹田 剛

論 文 名 ロシア語の名詞句における格と一致をめぐる

【審査の経過と結論】

匹田剛氏から博士学位請求論文「ロシア語の名詞句における格と一致をめぐる」が提出されたことをうけ、2022年12月14日開催の大学院総合国際学研究所教授会にて審査委員会が設置され、審査が開始された。

審査委員会は、川口裕司（本学総合国際学研究所教授）を主査とし、箕浦信勝（本学総合国際学研究所准教授）、野元裕樹（本学総合国際学研究所准教授）、井上幸義（外部委員：上智大学外国語学部名誉教授）、秋山真一（外部委員：上智大学外国語学部教授）の計5名の委員から構成された。

各審査委員による論文の審査および2023年1月28日に実施された最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるという結論に至った。

【論文の概要】

本博士論文において、匹田氏はロシア語の名詞句(NP)内部の一致および名詞句と述語との一致の現象について、典型的な名詞句だけでなく、非典型的な名詞句をも分析の対象として、より多くの一致現象を合理的に説明することを目指した。論文は10章からなり、1.~2.で研究の目的と前提をまとめ、3.~9.が本論部分、10.がまとめと今後の研究課題についてである。

1.ではロシア語の非典型的な名詞句である数量詞句について概観した後、ロシア語の数量詞が連続体的特徴を持っていることを示す。その上で本論文では、(i)ロシア語のNPの内外的における格や一致素性のやりとり・コピーを明らかにする。また、(ii)典型的なNPだけでなく数量詞句(QP)など、より多くの非典型的NPの説明を行い、(iii)数量詞(Q)というならかな連続体を成す非離散的な語類を離散的な説明理論に組み込むことを目指す。その場合、(iv)構築する説明理論はできる限り最節約性原理に従ったものとする。

続く2.ではロシア語の一致に関わる素性についてまとめた後、一致を実現するための名詞句内での文法素性のコピーについてまとめ、格が他の一致素性とは異なることを示した。

Babby(1987)によれば、数量詞の付与する格は一般に認められている属格ではなく構造格の数量属格であり、これより数量詞句の格環境における形態的パターンの違いが説明される。また、格境界(CB)という概念を導入し、CBが格付与による一致素性のコピーを妨げる「蓋」になっていると指摘した。

3.では、数量詞句主語と述語の一致には最大3つの異なるパターンが見られ、なぜ複数のパターンが可能なのか、その原因の解明を試みた。典型的な名詞句の場合、それがどの節点であっても述語の一致に違いは見られないが、数量詞句の場合はコントローラに指定された節点によって一致の形態が異なる。すなわち、句の頂点が節点に指定された時、非過去時制では3人称複数形に、過去時制であれば複数形(pl.3と略記)になり、格境界の下に節点が指定されれば、非過去時制では3人称単数、過去なら中性形(n.sg.3と略記)となる。これにより数量詞句主語と述語の一致は複雑な振る舞いを見せるのである。

4.はロシア語の数体系に関する議論である。本論文では秋山(2002)の研究に従って、通常「単数形」と考えられる数詞「2、3、4」に後続する名詞の形態は「少数形」と考える。そして格が数量属格などのいくつかの条件を満たさない場合は「複数」に融合する。ロシア語に「少数」という第3の数概念が存在することは以下の議論の前提となる。

5.では有生性の一致について考察した。ロシア語の対格形は①独自の形態、②属格と同形、③主格と同形の3種類の形態がありえる。3つのパターンでは一致定語(AM)と名詞がしばしば同形になるので「有生性の一致」と呼ばれる。本章では、まず対格の属格化規則について議論し、先行研究とは異なる有生性と性、屈折タイプを条件とする属格化規則を提案した。この規則が正しく機能するには複数における性と屈折タイプの消失が大きな意味を持っている。また、属格化規則は条件が揃えばどこでも即時適用されるが、主格化規則は樹形図の末端でのみ起るため、統語法と言うより形態法に関わる現象であると結論づけた。これらのルールを導入することで、典型的な名詞句だけでなく数量詞句の場合も正しく対格の形態を予測することが可能になった。

6.では、「少数数量詞(PcQ)」と呼ばれる数量詞は統語法に入る前に予め辞書で数量属格が付与されていると主張した。前章までの考え方では、主格環境に置かれた少数数量詞句(PcQP)のPcQに性の対立が残ることが説明できなかった。これを解決するために、Hikita(2020)ではPcQは辞書の段階で予め与えられた「数量属格(PreGenQ)」を持っていると考えた。さらにPreGenQを仮定することで、分配の前置詞no「～ずつ」が数量詞句を支配する時に格形式のバリエーションになるという従来からの問題を解決し、さらにPreGenQが通時的に「上位数量詞(HQ)」タイプの数詞にまで拡大したと考えることで、不可思議なバリエーションを合理的に説明できた。

7.では、5.で提案した数量詞句のNの一致素性にCBを越えることを認める素性群が複雑であったため、それらの見直しを行った。そのため本章では名詞句内部における横方向および上方向の素性のコピーと述語の一致について、それぞれ例を検討することで、より単

純な規則に還元できることを示した。本章で提案した規則のもつ重要性は、従来から指摘されている、数量詞句に複数の「一致定語(AM)」がつく場合には、述語の一致は p1.3 しかあり得ないという事実を説明できるようになることである。

8.では、職業・身分を表す男性名詞が女性の人間を指示する時、一致が男性形でなく女性形になる問題を議論した。Pesetsky(2013)は \mathcal{K} という「ゼロ形態素」を導入することで説明を試みている。一方、光井(2018a)は Pesetsky(2013)が取りこぼしている点をさらに説明するために「 \mathcal{K} の非活性化」規則を提案した。本章では光井の記述的説明を本論文の体系の中に取り込むために、「女性と第 1 変化は共存できない」というフィルターを設定した。なお女性と第 1 変化が共存できないということは記述的にも他の点で確認できる。

9.では、本論文での提案がどれだけ効果を上げているかを吟味するために、「少数数量詞(PcQ)」を含む数量詞を対象として体系的な理論構築を試みた Pesetsky(2013)の解釈と本論文の解釈を比較した。その結果、本論文が説明できる範囲はまだ狭い範囲に限られているものの、想定した理論的構築物は Pesetsky(2013)より遙かに少なく、よりシンプルかつ合理的な体系による説明が行えたと言える。また、ここで設定した規則やフィルターの多くは、本論文とは別の領域で記述的に既に指摘されてきたものであり、理論のみに依存していない点は説得力を増していると思われ、新たな規則の組み込みが引き起こす矛盾も少ないという利点がある。

10.では、本論文の要点をまとめた上で、残された課題を示した。本論文はロシア語の非典型的な名詞句も含めてより多くの一致現象を正しく予測・説明することを目指しているが、もちろん全てが説明できているとは言えない。今後の課題は本論文の中でも言及しているが、それ以外にも残された問題はある。10.2.では大きく 6 つに分けて今後の課題を紹介した。

【最終試験の概要】

2023 年 1 月 28 日 13:30~16:10 に最終試験を実施した。最初に学位申請者が論文の概要を説明し、その後各審査委員との質疑応答が行われた。最終試験は 2 時間 40 分に及んだ。

まず、審査委員が高く評価した点を以下に挙げる。

- ・複雑なロシア語の数量詞を含む名詞句における格表示と一致について、意味や用法面からの分析に主眼を置かず、専ら形式面からその規則性を明らかにすることに成功した。

- ・Corbett が提唱した「形容詞から名詞へと連なる数詞の連続性」をさらに発展させ、数量詞の連続性（非離散性）を「離散的な説明理論」によって、かなりの程度解明できた。

- ・数詞を中心として、典型的ではない名詞句に関して、先行研究では見過ごさ

れていたり、うまく説明できていない言語事実を網羅的かつ広範囲に分析した。

- ・「少数 paucal number」や「数量属格」という新たなカテゴリーを導入することで、従来の記述がより単純かつ合理的になる可能性を示した。

- ・生成文法の枠組みを利用しているが、分析手法はロシア語学の記述に主眼が置かれており、生成文法に明るくない読者に対しても配慮がなされている。

その一方で、以下のような若干の疑問点と指摘が出た。

- ・最新の言語コーパスを利用したデータ分析があればより望ましかった。
- ・複合数詞と合成数詞についても今後検討していただきたい。
- ・ある程度は止む終えないことであるが誤字・脱字が散見された。

上記の疑問点や指摘に対する学位申請者の応答は極めて明快であり、今後の課題とすべき点を踏まえた的確な回答であった。また、いずれの疑問点や指摘も本研究がロシア語学における重要な学術的貢献であるという前提の上で、匹田氏の今後の研究の方向性を示唆したものであり、本論文の価値を些かも損ねるものではない。

以上、博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、学位申請者匹田剛氏に論文博士の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。